



# 少年乱歩



古野なおゆき

明治四十三年（1910年）の名古屋は一つのイベントで盛り上がっていた。

鶴舞公園で開かれた第十回関西府県連合共進会である。関西府県連合共進会とは明治16年（1886年）大阪で第一回が開かれてから、三年から五年おきに広島、京都、金沢など西日本で開かれた博覧会であり、明治四十三年、名古屋で開かれた第十回が最後になる。その規模は最大で三府二十八県が参加、三月十六日から六月十八日までの九十日間の開催期間中、二百六十万人もの入場者を数えた。

旅順海戦館、機械館、特許館、台湾館、空中天女館、パノラマ館、不思議館、世界一周館、活動写真館、舞踏館などが会場となる鶴舞公園内に所狭しと並んでいた。

当時まだ愛知五中（今の瑞稜高校）の学生だった後の江戸川乱歩こと、平井太郎少年も、それらの見せ物に目を輝かせていたに違いない。

平井太郎、後の江戸川乱歩は明治二十七年（一八九四年）三重県名張に生まれたが、父親の仕事の都合で一歳の時に亀山、そして三歳の時には名古屋に移り住んでいる。そして十八歳までの多感な少年時代を名古屋で過ごしている。

その頃の平井家は今の伊勢町、丸栄百貨店南側の名古屋証券取引所の辺りに住んでいたが、太郎が通う愛知五中は熱田駅から東に二キロあまり行ったところであり、通学に不便で、太郎自身、身体が弱かったために、学校の寮に入り勉学に励んだ。

当時の名古屋は、東京と大阪の中間点にあることから東海道本線などのインフラが整備されると、もともと豊かなこの土地は民間の力により紡績など軽工業が発展、求心力を強くし周辺地域から豊田自動織機の豊田左吉、電力王となる福沢桃助など多くの人材を集めることが出来た。

平井太郎の父、平井繁男もそのような人物であった。東海紡績同名名古屋支部の書記長を務め、名古屋経済の重鎮、奥田正香と知遇となり名古屋商業会議所に勤務。そして奥田の経営する奥田商会の支配人となっていく。

名古屋も明治の終わり頃になると、明治四十年（一九〇七年）には熱田を併合し、人口も四十万人を超えて、東京、大阪に次ぐ、京都、横浜に迫る都市に発展していた。

その中で開かれたのが第十回関西府県連合共進会であった。名古屋市もこの博覧会に向けてインフラを整備、新栄から会場である鶴舞公園を經由して上前津まで走る市電の公園線が開通。そして名古屋一の繁華街である栄町に伊藤呉服店（松坂屋）が近代的なデパートメントストアをオープンさせるなど、名古屋が大きく変わろうとしていた時だった。

少年達の目は輝いていた。見るものすべてが新鮮だった。三月、平井太郎少年は友人と真っ先に博覧会に来ていた。巨大な旅順会戦館に驚き、ロシアを相手に戦う日本海軍連合艦隊の姿に興奮した。機械館、まだ後進国であった日本の産業技術の進歩を肌で感じる事ができた。パノラマ館は果てしなく満州の荒野が続いている。世界一周館のまだ見たことのない海外に胸をわくわくさせた。

天女館はミスケンボールと言う米国人美女が壇上に登場すると、たちまち塔が現れ、空中に八

人の美女が飛んでいくという、電気を利用した観客の幻覚を誘うショーである。ミスケンスボール以外は日本人であるが、少年達の、いや世の男性の心を掴んだのは言うまでもない。

夜は夜で博覧会場にイルミネーションが灯り、まるで真昼のように会場を照らす。この世のものとは思えぬ華やかさに、少年の目は釘付けだった。

太郎少年の頭の中には博覧会の興奮の余韻が続いていた。いまだに博覧会の会場にいるみたいだ。

(また行ってみたいな・・・)

好奇心旺盛な少年は思い続けた。そして友達を誘う。しかし反応は冷やかだった。

「一度行ったからいいだろう。人混みも多いしお金もかかるよ。僕は遠慮するよ」

博覧会場や各館へ入るには入場料がいるのだ。

仕方がなく太郎は一人で行くことにした。その頃の太郎は友人と「中央少年」という雑誌を出し、近所の小学生達に売ること小遣いを稼いでいて、お金には余裕があった。

こんなところにこんな館があったかな？ 太郎は不思議そうに一つの館を見ていた。

それは太郎が一人で鶴舞の関西府県連合共進会の会場に行ったときだった。関心のあった「パノラマ館」「世界一周館」「旅順会戦館」を見て回ったときだった。すでに夕方になっている。太郎は一人の少女に気を止めた。幼い少女だった。無垢な瞳で見つめている。

その少女が声をかけてきた。

「お兄さん・・・こっちに来て・・・」

少女は太郎の手を引っ張り誘う。途中で手を離すが、太郎は少女の後を追った。

(どこに行くのだろう?)

いつもの太郎なら、そのような誘いには乗らないのだが、相手がまだ幼い少女なので、太郎は警戒することなく、少女の後を追った。

気がついたら博覧会場の外れに来ていた。あれだけ人がいたのに、このあたりには全く人がいない。そして少女の姿もなかった。太郎はあちらこちらを見て少女を捜すが、どこにもいない。代わりに小さな館があったのだ。

入り口の看板にはシナ館と書かれていた。ほかの館とは比べるまでもなく小さい。しかし華やかな装飾が施されており、エキゾチックな雰囲気。太郎は何か不思議な力に引き込まれるようにシナ館の中に入った。中には誰もいない。入場料を払おうと思っていたが、これではどうやって払えばいいかわからない。

中はがらんとしている、しかし奥に不思議な大きな箱が置かれている。その箱には覗き眼鏡みたいな器具がついている。望遠鏡や顕微鏡の対眼レンズのようなものだ。太郎がその箱を覗いてみたいという衝動に駆られた。改めて辺りを見回すが誰もいない。それでおそろおそろ無断で中に入る。心臓がはち切れんばかりにドクンドクンと高鳴る。

箱の前に来る。再度辺りを見回すが誰もいない。体が震えるのを押さえながら、覗き眼鏡の中を覗いた。

「えっ、ここは・・・？」

箱の中を覗いた太郎は驚いた。覗き窓の中には広大な空間が広がっていたからだ。どこまでも続く原野が広がる、その中に畑と小さな小屋が建っていた。

どこかで見たことのある光景だと思った。そうこれは満州の光景ではないだろうか。ああ、なんて広い原野なのだ・・・狭くちっぽけな日本と大違いだ。一度行ってみたい。この広大な原野のど真ん中でぐるりと回りその広さを実感してみたい。

太郎は夢中になり、食い入るように覗き窓の光景を見ていた。

そのときだった、太郎のすぐ後ろで老人のような男性の声がした。片言の日本語だった。「あなた、熱心に見ているね。そこがどこかわかるかね？」

太郎はその声に驚いて後ろを見た。中国の服を着た老人が立っていた。白い立派なひげを生やしていた。いつから後ろにいたのかわからない。太郎は萎縮した。

「ごめんなさい。誰もいなかったから勝手に入って見てしまいました」

「いいよ、あなた、平井太郎君だね。あなたが来るのを待っていたよ。私は陳という」

太郎はどうしてこの老人が自分の名前を知っているのかと驚いた。

「どうして僕の名前を知っているのですか？」

「あなた、前にこの博覧会にきている。あなたの友達から聞いた」

それで自分の名前を知っているのかと納得しながらも、半信半疑であった。

「あなた、シナに興味あるね？」

「えっ、ええ、シナは広いし歴史があります。とても興味があります」

「あなた。シナに行ってみたいとは思わないか？」

「はっ、はい。一度行ってみたいと思ってます」

「シナへ連れてってあげよう」

「えっ、本当ですか。でもお金はそんなにありません」

シナに連れてってやるといわれ一瞬喜ぶものの、その前にお金という現実があった。

「お金はいらないね。あなただけでは寂しい。友達を連れてくるといいね」

「本当ですか。それでいつ連れて行ってくれるのですか？」

「五日後に、新大須ホテル来るあるね。二日そこで泊まる、お金はいらない。私呼びに行く、いいね」

「・・・・・・・・」タダでシナに連れてってくれるという破格の条件に何も言えなかった。「いいあるか。五日後に新大須ホテル、友達も連れてくるね」

陳老人は念を押して言った。

「わかりました、五日後に新大須ホテルに行けばいいのですね」

太郎はシナ館を出た。すでに彼の気持ちはシナの広大な大地に跳んでいた。

どこまでも続く広大な大平原、遙か彼方の地平線に沈む真っ赤な太陽。話に聞くシナの大地に行くことができるのだ。太郎の興奮は止まなかった。

しかし頭のいい太郎少年、ただ単に喜んでいるばかりではない。

もし奴らが悪党で、自分を人身売買団の一味でどこかに売り飛ばそうとしたら？

そうしたら戦おう。ナイフを肌身離さず持ち、何かあればナイフで戦おうと考えた。好奇心旺

盛な少年の冒険心を刺激した。

心がシナの大平原に向いたまま、外に出る。あたりはすでに暗闇が支配している。しかし鶴舞の会場は電飾が輝き幻想的な雰囲気であった。

寮に帰ると早速、友人や後輩たちを集め、シナ館での陳老人の話をした。

「君たち、シナに行かないか。タダで連れてってくれるぞ。今日、博覧会場に行ったらシナ館の人がタダで連れて行ってやると言った。僕はシナに行きたい、こんな狭い日本よりもでっかいシナに行きでっかいことをしてみたい」

太郎は目を輝かせながら、寮の仲間達に言った。

「大丈夫か、博覧会にシナ館なんてなかったぞ。その陳とか言う老人、人身売買集団の頭領じゃないか。僕はおめんだね、タダで連れてってやるなんて話ができすぎている。どこかに売り飛ばされるのが関の山だ。平井君もそんなうまい話に乗せられるなよ」

友達の一部が忠告した。しかし太郎はその忠告を聞くわけがない。そのことは計算済みだからだ。

「僕もそのことは考えてみた。もし陳老人が悪党だったら、戦えばいいじゃないか。ナイフで自分の身を守るんだよ」

鉛筆を削るときにナイフを懐から取り出した。果たしてこのようなナイフで悪党と戦うことができるのか、疑問に思うが、急所を刺せば倒すことができるはずだという。

「拳銃を持っていたらどうするんだ。拳銃じゃナイフでは勝ち目がないよ」

結局、太郎の話に乗ったのは後輩の二人だけだった。二人は井上君と高橋君という、二人とも目を輝かせていた。井上君は大柄で、寮のなかでも一番の乱暴者。高橋君は反対に小柄だが、動きがきびきびしていた。

「平井さん、僕を連れてってください。こんな狭い日本よりもでっかいシナで大きいことをしてみたいです」

小柄な高橋君が言った。

「そうだ、シナで稼げば今度はシベリア鉄道でヨーロッパにも行けるぞ。大連からハルピンまで行きそこから東進鉄道で満州里を通りチタからシベリヤ鉄道だ。世界一長い鉄道だからね。サンクトペテルブルグまで一週間以上はかかる。でも降りればヨーロッパまであとわずか、ベルリン、花の都パリ、霧のロンドンが僕たちを待っているのだ」

少年達の頭には物語の中のルパンやホームズの活躍が身近なものに感じられた。

「大西洋を渡ればニューヨークだ、アメリカはエドガー・アラン・ポーがいる。僕はポーみたいな作家になりたいのだ。ペンネームも考えている、エドガー・アラン・ポーをもじって江戸川乱歩とつけるつもりだ。まずはじめにこの冒険譚を書くつもりだよ」

太郎は自分の将来の夢を熱く語った。

「それで学校はどうするのですか。無断で休むのですか？」

後輩の一部が言う。ほんの数日休むだけだと思っているのかもしれない。

「退学届けを出す。もう学校には戻らないつもりだよ」

「えーっ、退学って。学校を辞めなければならないのですか？」

二人はシナへの渡航がどれほどのものか、まだわからずにいた。

「ああ。僕は五年、いや、十年は日本に帰らないでいるつもりだ。シナで一山当てて世界一周するのだから、それぐらい掛かるよ。君たちもそれぐらいの覚悟は出来ているのだろ」

二人は躊躇っていた、顔を見合わせ黙りこくっていた。そしてその中の一人が発言した。

「僕たちは学校では厄介者です。このまま学校に行ってもつまらないだけだ、平井さんが言うようにシナに渡って一旗揚げた方がどれほど面白いだろうか。僕は平井さんと一緒にいきます・ ・ ・ いかい高橋君。もう後戻りできないからな」

井上君が太郎を見て言うと、次は太郎が二人を見ながらいった。

「みんな覚悟は出来たね。五日後に新大須ホテルに行く、そこで二日ほど泊まり陳老人が来るのを待つのだ。だから直前の四日後に退学届けを出す。それまでに退学届けを書き上げないといけない。両親は反対するから必要な印鑑を偽造しなければならない」

「僕が印鑑を作る。四日後までに間に合わせる」

高橋君が言った。

「ああ、高橋君は器用だから頼んだぞ」

少年達はまだ見たことのない異国の大地を夢見ながら、決行の日を待った。

その頃、巷では一つの事件で持ちきりであった。どんな事件があったのか？ いや、これから起こる事件のことだ。

今回の共進会には「ベンガルの青い瞳」というインドで見つかった五十カラットもある大粒のサファイアが出品されていた。その「ベンガルの青い瞳」を盗賊団が狙っているのだ。犯行予告が共進会の主催者の他、警察や新聞社などに送りつけられ社会を騒がせることとなった。

盗賊団の首領の名は「二十面相」。東京を中心に多くの絵画、彫刻、陶磁器、仏像といった美術品を盗んでいる凶悪な盗賊団だ。

愛知県警は、「これは明らかに我々に対する挑戦だ」と憤慨し、警備を厳重にした。

主催者は東京から「二十面相」を相手に犯行を何度も未然に防いだ明智小五郎という高名な私立探偵を呼び、「ベンガルの青い瞳」を二十面相から守ろうとした。

そんな中で平井太郎たち三人は母校、愛知五中に退学届けを提出し、シナ渡航計画が決行されたのだった。

三人は陳老人が迎えに来るまで、新大須ホテルに逗留することとなる。新大須ホテルは大須の東、上前津の少し奥まったところにあった。ここは大須観音というよりも万松寺の門前町になる。

このあたりは江戸時代は隠れ里と呼ばれる寂しいところであったそうだが、大津橋通りに栄町と熱田を結ぶ名古屋電鉄熱田線が明治四十一年（1907）に開通し、明治四十三年（1910）に博覧会の開催に合わせて上前津と新栄を結ぶ公園線が開通し、上前津は乗り換えのターミナルとして将来の発展を約束された新興の繁華街である。

この新大須ホテルのオーナーも博覧会に来る客の需要を見込んで、この上前津の地にホテルをオープンさせたのである。

木造二階建ての、それほど大きくないホテルではあったが、将来を見込んでの洋風の造りは少年達の眼には新鮮に写ったことは言うまでもない。しかしその目新しさに戸惑いを感じたのも事実だ。

しかし太郎はそのような戸惑いを見せることもなく、中に入るとずけずけとカウンターまで行く。そして支配人に告げる。支配人は洋風の背広を着ている。

「平井だけれど、予約しているはずですが・・・」

「平井様ですね、承っています。失礼ですがお泊まりは何名様になられるでしょうか？」

支配人は何人が泊まるか知らないようだ。宿泊料金は陳老人の方が払うことになっているが、何人連れていくか知らないはずだ。

「僕も入れて三人です」

「三名様ですか。かしこまりました。それではここにお名前を書いてください。後ほどお部屋にご案内します」

太郎は帳面に記帳した。しかし部屋にはすぐに案内されなかった。人数分のベッドがしつらえていないのだ。支配人は「すぐにベッドのしつらえをしますので、ロビーでお待ちください」と

いい、彼らをロビーのソファに座らせた。太郎はもう一度カウンターに行き何かを頼んで戻ってきた。

ふわふわのソファは座りごちが良いのか悪いのかわからない。そしてしばらくすると前掛けをした綺麗な若い娘が取っ手の付いた湯飲みを三つつもってきた。井上君と高橋君はその女給の美しさに見とれた。女給はそれぞれの前にまず皿を置きその上に湯飲みを置いた。中には黒い液体が入っている。湯気が白く立ち上がり熱そうだ。好奇心旺盛な井上君が気が早いのかその液体を恐る恐る一口含んだ。

「苦いっ！ なんだこりゃ」

その苦さに吹き出すのを必死に押さえる。そして苦虫をつぶす。

「これは珈琲という飲み物で、お砂糖とこのミルクを少し入れて飲まないと苦いですわよ。お砂糖は小さじで二杯ぐらいが適当だと思いますわよ」

女給は少年の驚きように笑みをこぼしながら、シュガーポットとミルクを置いた。

「井上君は少しせっかち過ぎるよ。珈琲の飲み方ぐらい知っておけよ」

太郎はミルクと砂糖を入れながら言った。

女給の名前は吉川珠恵というまだ十九歳の娘だった。三月に入って二ヶ月になる。年若い彼らにはあまりにも魅惑的な存在だった。じっと彼女の方を魅入っていた。

それを打ち破ったのが新聞を読んでいた太郎の一言だった。

「明智探偵が名古屋に来ているのか！」と新聞を見て大声で叫んだ。

少年達は呆気にとられ、ぽかんと太郎を見た。太郎は少し心を落ち着かせて、

「君たち『ベンガルの青い瞳』というサファイアを知っているか。博覧会の目玉になっている大きな宝石だ。それが『二十面相』に狙われていると今話題になっているだろう」

「うん、その話しは今とっても話題になっている。会場じゃ警官がうようよいるらしいよ。東京から明智小五郎という凄腕の探偵が呼ばれたと言うじゃないか」

高橋君が言った。

「ああ、新聞に明智探偵が名古屋に来ていると書いてある。日本一の名探偵だ。どこにいるのだろう？ どんな人だろう、会ってみたいな」

警察もお手上げの難解な事件を次々事件を解決し、その度に新聞を賑わせた人物である。太郎にとって最も憧れる人物であった。その人物が名古屋に来ていると思うだけで、身近な人物に感じ感慨深いものがある。

そうこうしているうちに支配人が来て、部屋の用意が出来たと告げる。そして荷物を持ち、部屋に入った。

少年達は暇を持て余した。無理もない、好奇心旺盛な元気な少年達を、狭いホテルの一室に二日も閉じ込めるなど、所詮無理な話である。初日こそ、シナへの想いを長々と語り合っていたが、二日目になると暇を持て余していた。

井上君が宿泊客に怪しげな人物がいると報告してきた。彼は吉川珠恵に好意を抱き、ロビーで珈琲を飲んでいた。すると一人の男がホテルに入ってくるのが見えた。顔に大きな傷のある船員風の男。いかにも怪しげな男である。

あの男のことを珠恵に聞いてみると、二日ほど前から逗留しているという。毎日必ず決まった時刻にホテルから出て、決まった時刻に戻ってくると言う。

好奇心旺盛な井上君はその男に興味を持ち、部屋に帰ると太郎に報告した。

「顔に大きな傷がある？ 怪しげだな。決まった時刻に外出するのか、どこに行くのだろうか？ 二十面相の仲間かもしれないぞ。尾行してみよう」

少年達は、交代で男が出て行くのを監視していた。男が出て行くのを確信すると、太郎達に伝えた。そして三人で怪しい男を尾行した。

男はホテルを出ると南に下り岩井通りという電车道に出る。今の須通である。この道を東に進むと関西府県連合共進会の会場である鶴舞公園に出る。共進会に合わせて電車が敷設され上前津はその起点になる。

（もし奴が二十面相の仲間だったら、鶴舞の方に行くぞ）と期待したが、予想に反して西の方に向かう。

西に向かえば大須観音の方だ。芝居小屋や映画館などがある歓楽街である。男はそちらの方にスタスタと歩いて行く。この辺りは家などほとんど建っていない寂しいところであったが、西に進むにつれて家が多くなっていく。

少し広い通りを渡る。門前町通りである。これを北に進むと名古屋城下の本町通りになる。南に下ると宮の宿場、熱田に出る。かつての名古屋のメインストリートである。この岩井通りは共進会に合わせて計画された通りで、急ぎ用地を買収しその年の二月に開通している。市街電車も上前津止まりでその先はまだ開通して無い。だからどこか閑散としていた。それに比して門前町通りは人通りが多く賑やかであった。

通りを渡ると七ツ寺の三重の塔がだんだん近づいてくる。七ツ寺も大きな寺であったが、岩井通りの開通のために境内の南を失い狭くなった。その背後には歌舞伎座の大きな建物の屋根が見える。このまままっすぐに行くと思ったが、男は細い路地を右に曲がる。その先には大須観音の参道である仁王門通りに入る。

大須観音は正しくは北野山真福寺宝生院と言う。昔は岐阜県羽島市大須にあったが徳川家康の命で現在の地に移された。

かつて大須観音の境内には五重塔がそびえていたが、明治二十五年の大火で本堂もろとも消失している。再建された本堂も戦火で失っている。現代の本堂は南向きに建てられているが、以前は東向きに建てられていた。江戸時代からこの境内には芝居小屋や寄席が掛けられていた、名古屋一の歓楽街である。

男はその中の一つの寄席に入った。太郎達も入る。男は笑いながら舞台を見ているが、太郎達は眼を血眼にして、男が何か怪しいことをしないかと監視していた。顔つきが怖かった。周りの客は三人に近づきがたい雰囲気を感じていた。

一時間ほどで寄席を出る。西に向かい歩く。その先には仁王門があり大須観音の境内だ。人混みの中を男はふらふらと歩いて行く。その後を太郎達は真剣な面構えで追いかけていく。男は尾行されているなど思っても見ないだろう。大須観音の境内に入り、大須観音でお参りをする。そして一本北の浅間通りに入る。人通りは多い。いろいろと店が並んでいた。

途中で左に曲がる。広大な空き地が広がっていた。かつては浪越公園といわれた、明治九年に開園した名古屋で初の公園である。前方後円墳があったところで、後円部分が残り富士山に見立てて展望台がしつらえていた。しかし広さが六百坪と手狭で、明治四十年に閉園している。跡地はタヌキ山といわれるほど誰も寄りつかない場所であったようだ。現在は那古野山公園となっている。

男は木の下で突っ立ったままであった。

「誰か待っているのかな？」

太郎達は、じっと男を監視した。井上君はあまり関心がないのか、しゃがんで下に落ちている木の実を拾っていた。

そこに一人の男が来た。四十歳ぐらいの鼻の下にひげを生やし背広を着た背の高い大柄な男だ。目つきも悪く怪しげな雰囲気だ。二人は顔見知りらしくなにやら話をしている。

「あの二人、仲間同士かもしれないな。二人とも怪しそうだ、何を話しているのだろうか？ やっぱり二十面相に一味かもしれないぞ！」

「あ、あの二人、歩き出した。どこに行くのだろうか？」

少年達は二人の男の動向を注視した。

二人の男は浪越公園跡を北の方に出る。さらに北に進み赤門通りに突き当たると別々の方向に歩き出す。顔に傷のある男は西に向けて歩き出し、ひげを生やした男は東に歩き出す。

「二人は別れたぞ。僕たちも二手に別れよう。僕は傷のある方を付けるから、井上君と高橋君は髭の男を追ってくれ。くれぐれも慎重に頼むよ」

太郎は井上君と高橋君に指示を与えた。そして顔に傷のある男を追った。男は西へ、西へとずんずんと歩いて行く。

二百メートルほど歩いただろうか、ふと男が消えてしまった。見失ってしまったのだ。

「しまった！ 見失った」太郎は狼狽えた。辺りを見回すがどこにもいない。

さらに狼狽えたのはこの先は旭遊郭なのだ。花園通りといい、旭遊郭の中心地だ。太郎のような未成年の入れるような所ではない。

けばい化粧をした遊女がまだ未成年の太郎をなにしに来たのと言いたげにじろじろと見ている。旭遊郭の入り口で戸惑っていると、横から男の声がした。

「小林村の少年、誰か探しているようだね」しゃがれた声だった。

小林村とは新大須ホテルのある上前津あたりを指す。

そして顔に傷のある男が現れた。

「君たちの探しているのはこのような男かね」

だがその口調は、先ほどのしゃがれた声とは違った。しっかりしたものだった。

「探偵ごっこはほどほどにしといた方が身のためだ。君の尾行ではすぐにばれてしまう。もし敵が凶悪な男だったら、命はないものと思いたまえ！」

厳しい口調で太郎を諷めた。傷のある男は顔に塗られているものを剥がすようにぬぐい取った。その下から出てきた素顔に太郎は驚いた。

「まさか、あなたは・・・」

太郎が新大須ホテルに戻ると、髭の男を追っていた後輩達はすでに戻っていた。

「ああ、平井さん、戻ってきましたか。どうでした、男の正体がわかりましたか？」

「いや、途中で巻かれた。君たちの方はどうだった・・・」

太郎は男の正体を明かさなかった。これが男との約束だった。

「驚きました、あの男、警察の関係者でしたよ。あのままずっと赤門通りを東の方に歩いて行き、門前署に入りました。立ち番の警官が敬礼していたから、警察の関係者だと思います。私服刑事かもしれないな。かなり偉そうだが、どう見ても警察官に見えないな」

少年達は訳もわからず、何か大きな事件に巻き込まれていくのを肌で感じ、わなわなと昂揚していた。

太郎達が顔に傷のある男と、彼と接触した男を尾行した翌日の夜、事件が起こった。

二十面相が「ベンガルの青い瞳」をまんまと盗み出したのである。その日はインドから国王が共進会の会場を訪れていた日であった。日本の警察にとってこれ以上の恥さらしはなかった。

「名探偵、明智小五郎がいながら、二十面相にしてやられるとは、なんたるていたらく！」 共進会の主催者は激怒した。しかし不幸にもその日、明智小五郎は体調不良で犯行現場である鶴舞の会場にはいなかったのである。

事件はこうだった。鶴舞の会場は停電となり、その際に「ベンガルの青い瞳」は持ち去られたのだ。会場は騒然となった。大勢の警官が追跡したが二十面相は捕まらなかった。

その頃小林村上前津の新大須ホテルでは、太郎達が陳老人との約束の期日が来たので、ホテルを出る準備をしていた。

「陳老人の使いが来たら、すぐに出れるように準備は整えておこう。例のは持っているね。ナイフとパチンコ、それに撒き菱代わりの画鋏・・・」

太郎は何があってもいいように、ナイフとパチンコ、そして撒き菱代わりの画鋏を持たせた。彼らができる精一杯の武装であった。

午後八時を過ぎた頃、一人の男が呼びに来た、小男だ。陳老人ではなかった。太郎達は訝しげな眼で小男を見た。

「陳老人はどうして来ないのですか？」

「あの人は忙しい身だ。ここには来られない。先に熱田駅に行っている。これを渡すように頼まれた。これを大事に持って熱田へ行く市電に乗れ」

小男は小さな袋を太郎に渡した。小さいから軽いと思っていたが、思ったよりずしりとしている。何が入っているか気になった。

「これは何ですか？」

「中に何が入っているのか俺は知らない。俺はあんた達にこれを渡してくれと頼まれただけだ。熱田行きの電車に乗れ、そこに別の男が待っている、そいつが連絡係だ、そいつの指示通り動け」

小男は少年達を上前津の停車場に連れていく。そして熱田に行く市街電車に乗った。電車は共進会からの帰りの客で満員だった。

夜の帳がおり辺りは暗かった。暗闇の中を市街電車が火花を架線から飛ばしながらガタゴトと轟音を立てて南へと走った。

彼らを追う二人の男がいたことを、太郎達は気づいていなかった。男達は新大須ホテルから太郎達の跡を追った。そして同じ電車に乗り込む。電車内は共進会から帰る人でごった返していたので気がつかなかったのだ。

人々が鶴舞の共進会場で起きた「ベンガルの青い瞳」盗難事件で持ちきりだった。

「やっぱり二十面相は凄いな。あれだけの警備がいながら、宝石を盗んでいくなんて、まるで神業だったみたいだよ」

「そうだな、明智探偵がいながらまんまと盗まれるなんて、警察は何をやっているんだ」

「明智探偵はいなかったみたいだよ。体の調子が悪くてホテルで寝込んでいたそうじゃないか。凄腕の探偵と聞いていたけれどたいしたことないな」

その話を聞き、明智探偵を尊敬していた太郎は心の中で憤慨した。

(明智探偵はそんな人ではない。会場にいなかったのは何か訳があるのだ！)

その中で太郎に小さな声で話しかけてくる者がいた。

「平井太郎君だね・・・」

「ええ、そうですがあなたは・・・？」

「陳老人の使いのものといえはわかるだろう」

この男が連絡係と言うことになる。太郎は緊張して言葉が出ない。

「熱田で下りたら、熱田駅の改札に入れ。そこに二人の男が待っている」

それが陳老人なのだろうか。聞き返す間もなく男は太郎から離れていった。

熱田駅に着くと少年達は電車を降りて熱田の駅へと向かう。二人組の男も一緒に降りた。そして改札を通り駅の構内へ入る。二人の男が彼らを待っていた。陳老人ではなかった。

「あんたが平井太郎君か？」

「陳老人はどうしたのですか？ あなた達は誰なのですか？」

太郎は待っていた男に聞いた。、

「心配いらぬ。陳老人の使いのものだ。汽車で横浜に行く、横浜からシナに出航する船に乗るのだ。陳老人は先に横浜に行って待っている。俺達のことを信用しろ」

男は太郎の体をがっちり掴んだ。身に危険を感じた。

(いいかみんな、こいつの手を噛むから、一斉に逃げ出すんだ)

太郎は眼で他の少年に合図する。そして男の手を思い切り噛んだ。

「いててて、こいつ何をやるんだ！」

男が手を離れた瞬間、太郎は男の手から逃げ出すと、懐からナイフを取り出し、もう一人の男に突進しようとする。その時だった、「ピー」と呼び子の鳴る音があちこちでした。男達は驚き一瞬からだが止まった。太郎達は一斉に改札を抜けて駅から飛び出した。後ろで何が起きているのか確かめることもできなかった。

後ろでは大勢の警官が男達を捕らえていた。待ち伏せしていたのだ。鶴舞の会場で事件があったから、近隣の駅に警官が配置されていたのだ。

しかし太郎はそんなこと知らなかった。停車場に向かう。停車場には一台の電車が止まっていた。だが電車はゆっくりと動き出しているのではないか。少年達は停車場から動き出そうとしている電車に飛び乗った。三人とも息を切らして客室に入った。

「これはどこに行く電車ですか？ 上前津に行く電車ではありませんよ」

少年の一人が驚いていった。来るときに乗った熱田線とは違う電車である。熱田からは名古屋港の築地口に向かう線が出ていた。熱田駅から熱田神宮の北側を通り堀川にかかる白鳥橋を超えて船方、千年（ちとせ）を通り名古屋港の入り口、築地口に出る路線である。

名古屋港は三年前の明治四十年にようやく開港した港だ。その名古屋港の築地口と熱田を結ぶ築

港線が開通したのは明治四十三年の三月十五日に開業している。

「名古屋港には奴らのアジトがあるんだ」太郎が呟くように言った。

「二十面相のアジトが名古屋港にあるのですか？ どうしてそれを知っているのですか」「今日の昼間に見てきた・・・」

太郎はその時のことを事細かく話した。それはこうだった。新大須ホテルに出入りしている業者の配達の方が、女給仕の吉川珠美となにやら話をしていた。世間話かなんかだと思っていたが、こっそりと見ていると珠美がなにやら紙を渡した。それで太郎はその男を尾行することにした。男は上前津の停車場から電車に乗り熱田方面に向かう。太郎も帽子を目深にかぶり尾行する。同じ電車に乗り込んでいるが、男は太郎に気がつかないでいた。男はすぐ後に乗り込んできた女と話しに夢中だったからだ。

太郎は男と少し離れたところに座る。そこに一人の男が近づいて話しかける。

「相変わらず尾行が下手くそだね、小林村の少年」

「あなたは・・・」太郎は驚き男を見上げる、見知った顔である。男は太郎の隣に座った。この男は、先日太郎達が須賀で尾行した顔に傷のある男のまた別の顔であった。

「幸いあいつは、女と話をするのに夢中で、君には気がついていない」

尾行している男は、隣の女とぺちゃくちゃ話ばかりをしていて、他のものが見えないでいるようだ。

「あの女は飲み屋の女将で、知り合いの船員の乗る船が出航することになっている」

「えっ、どうしてそんなことまで・・・」太郎は驚く。

「あの女は僕が手配したのだ。あの男は女に目がなくてね、いつもぺちゃくちゃ女と話ばかりしている。あまり頭は良くなさそうだ。だから君のことも眼に入らないのだ。あいつは二十面相の手下で、連絡役なのだ。女給の吉川珠美が君たちのことを監視していて、二十面相との連絡係があつた男なのだ。そしてこれから二十面相のアジトに向かうところだよ」「珠美さんが二十面相の仲間だったなんて・・・」

驚いて一瞬固まった。

「でもどうして二十面相は僕たちを監視するのですか？」

「君は知らないのか。陳老人が二十面相であることを。僕は二十面相の手下が出入りしているあのホテルに宿泊客として入り込み監視してきた。君たちのことは逐一警察に報告している。警察は盗んだ『ベンガルの青い瞳』を君たちに託して走査線を抜けようとしていると考えている。しかし二十面相はその裏をかくつもりだ」

それで大須の浪越公園跡にいた男に報告していたのだ。しかしそれ以上に陳老人が二十面相本人であったことに驚いた。

「陳老人が二十面相だったのですか。そうか、知っていたらあいつを捕まえていたのに」太郎は二十面相を目の前にしながら何もできないでいたことに憤慨した。

「明智さん、僕も二十面相の逮捕に協力したいです。何かお手伝いできることはありませんか？  
どんなことでもします」

「君たちはあいつらに言われたとおりに行動してくれればいい。しかし決して無理はするなよ。君

たちのことは警察が必ず守るからね」

そうしているうちに電車は熱田駅に到着し、そこから名古屋港へ行く路線に乗り換えた。

そして築地口に着き男は女と降りると別れて港の方に歩き出す。その後を明智探偵と太郎が追いかけた。

港の方には目新しい倉庫が何棟も建っていた。その倉庫の一つに入った。明智探偵と太郎は扉を少し開け中を伺う。倉庫の中は荷物が山のように積まれていた。二人は忍び足で中に入った。人の声が聞こえるのでそちらの方に移動する。そこには陳老人がいた。あの老人が二十面相とは・・・全く気がつかなかった。何か話をしている声が聞こえた。

「あの小僧達はどうするのですか？」

小僧達とは太郎達三人を指すのだろう。

「あいつらはどこかに売り飛ばす。今夜熱田駅に迎えに来させるから、引き渡すように伊藤には伝えてある」

最初から売り飛ばす気でいたのだ。陳老人の言葉を信じた太郎は背筋が凍る想いであり、また安易に信じたことを大いに恥じた。

そうこうしているうちに少年達を載せた電車は築地口に到着した。太郎は皆を二十面相のアジトである倉庫に導いた。

倉庫の中には陳老人がいた。そして明智探偵がスパイと目していた女給の吉川珠恵がいた。他にも連絡係をしていたおしゃべりの好きな間抜けな男もいた。

「陳老人がいるぞ、あいつが二十面相が変装しているんだ。それに新大須ホテルにいた女給もいる。あの女はやっぱり二十面相のスパイだったんだ」

「女給って、珠恵さんのこと？ あの人スパイだったなんて、信じられない」

吉川珠恵に好意を寄せていた井上君はショックを隠せないでいた。

「これからどうしますか？ 平井さん・・・」

「警察に連絡しないといけない。誰か連絡をしに行ってくれ。いや僕たちの後を追って警察が追いかけてくるかもしれない。築地口の停車場にいて、警察が来たらここに案内してくれ」

太郎はその役を小柄な高橋君に頼んだ。そして太郎と井上君は倉庫の外で警察が来るのを待つことにした。じっと倉庫の外で待っていると、男が背後から近づいてくる。そのことに太郎達は気がつかないでいた。男は手に大きなナイフを持っていた。

「おい、お前達、ここで何をしている！」

太郎を羽交い締めしてナイフを脇腹に突き当てた。

「近くの倉庫に用事があったのですが、どうやら建物を間違えたみたいです」

咄嗟に言い訳を吐いたが、男はそんなこと全く信用しなかった。

「こんな夜遅くにガキどもが来る場所ではない。お前ら、何しに来た！」

男はナイフの刃先を強く脇腹に押しつけてくる。

「お前、こっちに來い。もし逃げようとするならこいつの命はないぞ！」

男は太郎達の身体を検査した。小型のナイフやパチンコ、そして二十面相の手下の一人から渡された小さな布袋が出てきた。その中にはなんと「ベンガルの青い瞳」が入っているではないか。男はようやくこの少年達が二十面相に利用された少年達だと理解できた。

そして倉庫の中に入り、二十面相の前につきだした。

「ボス。こいつらがこの倉庫の中を探っていましたぜ」

「お前ら、熱田駅から横浜行きの汽車に乗ったのではないか・・・？」

陳老人に扮した二十面相は驚いた声で言う。

「ボス、こいつらは何ですか。こいつら、こんなものを持っていましたぜ」

「ベンガルの青い瞳」が入った布袋を二十面相に見せつける。

「そいつは偽物だよ。こいつらに偽物を持たせて、熱田駅から汽車に乗せて警察の目を引きつける。その間に俺たちは名古屋港からシナに行く貨物船で高飛びする。そういう手はずだ。こいつらはアメリカに売るつもりだったが、まあいい、香港にでも売ればいからな」

二十面相は本物の「ベンガルの青い瞳」を少年達に見せつけた。

「ベンガルの青い瞳」を奪った二十面相は、貨物船に乗り込みシナに高飛びする計画だったのだ

。二十面相をシナに逃亡させてはいけない。何とか警察に知らせ捕まえなければいけないと思った。太郎は男の隙を見て振り払い二十面相に飛びかかろうとする。

「おい、お前ら、おとなしくしている。騒ぐと命の保証はないぞ！」

二十面相は手に拳銃を持っていた。こいつに撃たれたら命の保証はない。太郎達は恐ろしくなり、血の気が引くように感じた。

その時だった。警官隊が倉庫にどたばたと踏み込んできた。

「警察が来たぞ。二十面相。もう逃げることはできないぞ！」太郎は叫んだ。

太郎達が須の浪越公園で明智探偵と会っていた男が、警官隊を引き連れて乗り込んできた。彼は中村警部と言った。

「二十面相、お前を『ベンガルの青い瞳』強奪容疑で逮捕する！」

中村警部は拳銃を二十面相に向けた。二十面相は絶体絶命だ。しかしニヤッと薄笑いを浮かべている。盗賊を取り囲んだ少年達や警官隊は不気味に感じた。

その時だった、パン、パン、パンとものすごい轟音がした。そしてもくもくと煙が立ち上がる。倉庫の中は辺り一面真っ白になり、すぐ眼の前が見えなくなった。二十面相をはじめとする盗賊一味もその煙幕の中に取り込まれていった。

突然襲った轟音と煙幕は、少年達と警官隊を狼狽えさせた。

「ゴホ、ゴホ、ゴホ。なんだこれは！ 前が見えないぞ、どうなっているのだ！」

中村警部が煙に咽せながら大きな声で叫んだ。太郎達や他の警官も咽せっいて倉庫の中は大混乱だった。そしてしばらくして煙が収まる。すると取り囲んでいた二十面相とその手下達がい

「あっ、二十面相達がい

「警部の一人は倉庫の床に抜け穴があるのを発見した。

「警部、ここに抜け穴があります。二十面相はこの穴から逃げたかもしれません」

警官が抜け穴をライトで照らした。

「この穴はどこにつながっているのだろうか？」

「よし、この穴に入るぞ。君、ライトで照らして先導してくれ」

若い巡査がライトを点けて抜け穴に先に入る。その後を中村警部達が続いた。そして最後に太郎達少年が抜け穴に潜り込んだ。

抜け穴をくぐり抜けるとそこは外であった。暗闇の中空には全天に星が輝いている。

中村警部が次に出て辺りを見回す。暗闇の中に倉庫が何棟も建ち並んでいた。

「二十面相はどこに行ったのだ？」

「見あたらないから、どれかの倉庫に隠れているかもしれません」

たくさんの倉庫が建っている。この一つ一つを調べていたら時間がかかるだろう。

そのうち次々と後続の警官が抜け穴から出てきた。そして最後に太郎と井上君が出てくる。

太郎は二十面相は貨物船で逃亡するから、港の方に行ったのではないかと中村警部に言った。しかし中村警部は、「貨物船はすでに出航した後だ、貨物船には乗れないのだが・・・」と不思議そうに言った。

その時だった、遠くの方から人が近づいてきた、警官は身構えるが、背が低いから少年であることがわかる。

「おい、お前、ここで何をしているのだ？」ライトを照らして問い詰める。

少年は太郎達の仲間であった。警察を呼びに行った高橋君だ。

「何だ、君か、二十面相を見なかったか？」

「二十面相なら向こうに行きました。僕に付いてきてください」

高橋君は警官隊を案内する。そして大きな倉庫の前に来た。

「二十面相はこの倉庫の中に入りました」

「この倉庫の中にいるのか。でかしたぞ、君」中村警部はねぎらった。

そして警官隊を大きな倉庫に突入させた。

「なんだこれは！」突入した警官隊にどよめき起きた。

大きな倉庫の中には巨大な大きな丸いものが見える。警官にはそれが何かわからない。

「あれは気球だ。本で見たことがある。これで空を飛んで逃げるつもりなんだ！でもこれでシナに渡るのは無理じゃないかな・・・そうか、わかったぞ。気球で貨物船に移る計画なんだ！」

太郎は上の方を見上げながら叫んだ。倉庫には天井がなく夜空が見えた。地上と繋いであるロープを外せば、すぐにでも飛び上がれる状態だ。

下にはゴンドラが付いていて、二十面相や珠恵が乗り込んでいた。手下の男は繋いであるロープを外すところでした。

ゴンドラの周りにはガスボンベがごろごろしていた。気球に詰め込んだ水素ガスが入っていたのだろう。

中村警部は拳銃を二十面相に向けた。いつでも撃てるが、太郎が止めた。

「だめです。気球の中には水素ガスが入っています。ガスボンベから入れたのでしょう。もしガスボンベに当たり残りの水素に引火したら爆発します。それが気球にでも燃え移れば大爆発を起こし、僕たちも死んでしまいますよ！」

「平井少年。君はなかなか博識だね。君のいうとおり上には水素ガスが入っている。もし火が点けば大爆発するよ。君たちも巻き添えになるよ。中田、はやくロープを外してくれ」

しかし中田という手下はロープを解こうとはしない。

「おい、何をしているのだ。はやくロープを解け！」

「ボス達だけ逃げて、俺は置いてきぼりでしょう。ロープはほどきませんよ・・・」

手下はつないであるロープをほどこうとはしない。二十面相は苛立った。

「何を言っている、お前だけを残すわけではない。ロープをほどいてすぐに乗り込めばいいじゃないか」

「ひひひ・・・」手下は薄ら笑いを浮かべた。二十面相はたじろいた。

「捕まるのは俺じゃないよ。二十面相・・・君だよ」

「中田じゃないな。貴様、誰だ！」

「二十面相、まだ僕が誰かわからないのか」

手下の声が変わった。明らかに若い声だ。そして化粧を落とす。そこに現れた顔に驚く。「  
貴様、明智！ いつの間にすり替わっていたのだ」

「ようやく気がついたね。二十面相君」

「くそっ！」二十面相は悔しがる。しかし顔色が変わった。

ゴンドラから飛び降り、そして懐から拳銃を取り出し、明智探偵に向ける。

「おい、明智。ロープをほどけ、言うことを聞かないと撃つぞ」

周りに緊張が走る。

しかし明智探偵は顔色ひとつ変えない。二十面相は狼狽える。

「おい、どうした。明智。ロープをほどけと言っているだろう」

そしてとうとう拳銃の引き金を引いた。

カチッ。しかし発射音は聞こえない。

カチッ、カチッ。何度も引き金を引くが弾は発射されなかった。

「ハハハハ。二十面相。いくら引き金を引いても撃てないよ。弾は抜いてある」

いつの間にか明智探偵は拳銃の弾を抜いていたのだ。

「くそ、明智！」

二十面相は持っていた拳銃を投げ捨てる。

しかし今度はライターを取り出し。そして近くのボンベの栓を開らく。おそらく未使用のボンベだろう、ボンベから大量の水素ガスが抜けていく。もし水素ガスに火がついたら爆発してしまう。

「まだ手があるぞ。おい、ロープをほどけ。ガスに火がついたら大爆発だ！」

「二十面相。ガスに火がついたらお前も死んでしまうぞ」

「ああ、わかっている。しかし貴様につかまるぐらいなら死んだ方がましだ。明智、ロープをはずすか、俺たちと一緒にあの世に行くかどちらかだ！」

これにはさすがの明智探偵も狼狽えた。可燃性の高い水素ガスだ。ちょっとした火花だけでも火がついてしまう。二十面相は死ぬ気なのだ。

「高橋君・・・パチンコを持っていたね。貸してくれ」

太郎が高橋君に聞いた。太郎たちの武器は二十面相に盗られたが、高橋君の武器は、そこになかったため盗られなかった。

太郎はそのパチンコを受け取ると、井上君に渡した。

「井上君はパチンコが上手いだろう。君がやってくれ」

井上君はポケットから何かを取り出した。それは木の実だった。昨日大須の浪越公園で拾った木の実だった。石や金属では火花が出る恐れがあるからだ。

そして硬い木の実を引っかけ、二十面相に狙いを定めてグイグイとゴムを引っ張る。

井上君は指を離れた瞬間、木の実は二十面相めがけて跳んでいった。そしてライターを持っている手にパシリと当たる。

「痛いっ」二十面相はライターを落とした。

明智探偵は二十面相のひるんだ隙を見逃さなかった。一気に襲いかかる。

「いまだ、みんな引っ捕らえろ！」中村警部が叫んだ。

警官隊が突入した。そしてボンベの栓を閉め二十面相とその手下たちを捕まえた。

明智探偵は太郎たちのところに来た。

「ありがとう、二十面相を捉えることができたのは、君たちの活躍のおかげだよ。君たちは立派な少年探偵だ。探偵団だ」

明智探偵は少年達をねぎらった。

明智探偵を尊敬している太郎は、盆と正月と一緒に来たぐらい嬉しかった。

「明智探偵バンザーイ！ 少年探偵団バンザーイ！」

多くの警官が見守る中。少年達は誇らしげに万歳をした。

太郎はこの顛末を小説にしようと、原稿用紙に向かいペンを走らせている。

主役はもちろん明智探偵と、私こと平井太郎。しかし自分の名を出すのは少し気恥ずかしい。何かいい名前をとを思いつつ、明智探偵が自分を小林村の少年と言ったのを思い出した。小林村は太郎たちが宿泊した新大須ホテルのある上前津のあったところだ。

太郎は主人公を小林少年と決めた・・・。

## 後書き

この話は江戸川乱歩が、愛知五中（今の瑞穂高校）の学生時代に、支那への渡航を画策した事件を元に作りました。この場合の支那は満州のことを指しています。

平井太郎は後輩の生徒と画策し、退学届けを偽造し学校に提出。渡航決行の時まで大須の宿屋に隠れていました。しかし宿屋の主人から学校に通報があり、体操の教師に踏み込まれ、計画は失敗に終わりました。

太郎は謹慎処分だけで済みましたが他の二人は退学処分となりました。

その後、大正元年（1912）太郎は愛知五中を卒業し、八高（今の名古屋大学）への進学を希望するものの、父親が経営する平井商店が倒産、一家は父の友人を頼り朝鮮の馬山に移住します。

しかし太郎は一人日本に戻り、九月に東京の早稲田大学政治経済学部予科に入学し、印刷会社で働きながら勉学に励み、そして江戸川乱歩として数多くの名作を発表するのはご存じの通りです。

残念なことに江戸川乱歩は名古屋を舞台にした小説はそれほどありません。しかしパノラマ島奇譚や影男に登場するパノラマ館や、黄金仮面の博覧会など、多感な少年時代を過ごした名古屋で体験した出来事が、後々の作品に影響を与えています。

完